



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 中央区日本橋蛸殻町2-1-1
 泉商事株式会社内
 電話 東京 (661) 6241
 振替口座東京 93487 番
 編集兼発行人 浮田信家

顕功院殿勲信居士にまいらす

現地派遣員に託して

母 江間 イクヨ

天皇皇后両陛下御臨場なされました全国戦没者追悼式に参列させて頂きましたことこの上なくありがたく思いました。

あなたが永遠の眠りにつかれた所に何とかして一度行きたいものと思いつつ、あれもこれも皆はかない夢となりました。

この度会長様始め役員の皆様御骨折りで幹事御二人が会を代表してはるばる現地に行って下さること、墓前で読んで貰ったらあなたに聞いて頂けると思ふこの手紙をしたためました。生前口ぐせに「福島県三春町に行きたい」と申しておりましたのでその通りにし、あなたと一緒に碑を建てました。

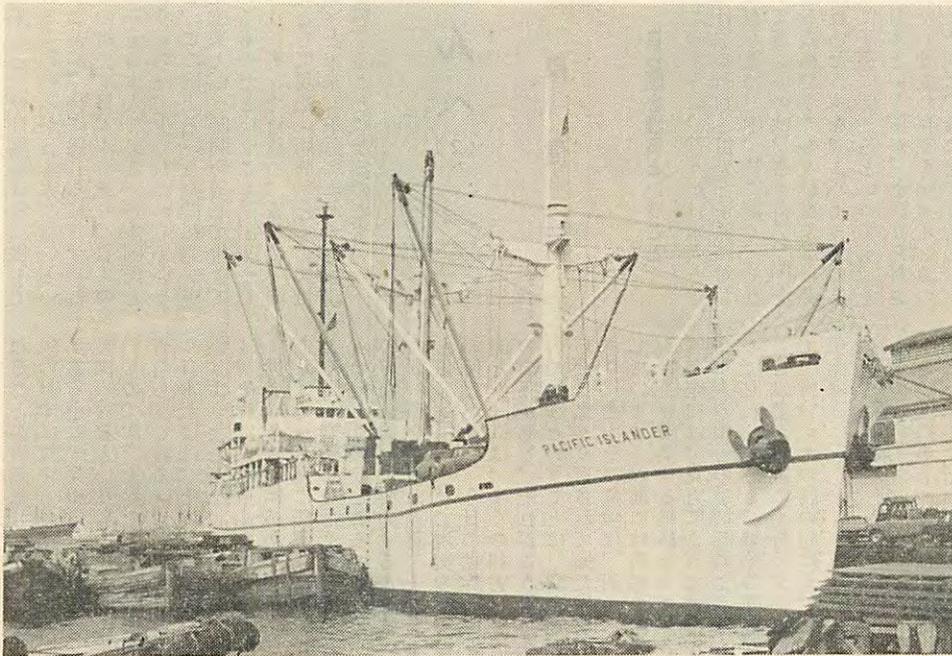
母はあなたが大学の卒業論文に武士道を選び、夫を実践して御国の為尽して下さったことを生涯の誇りに思い、ありがたく思っております。

とは云うものの、出發の時涙を見せまいとなるだけ口数少くと努めた切なさは今尚忘れられません。会が毎年二月六日に行います靖国神社昇殿参拜の時、神殿の大きな大きな御鏡を拝みますと、あなたのお顔がそこに見え、たまらない気がいたします。悠久の大義に殉じられた玉碎戦友の皆様と安らかにおやすみ下さい。私は命ある限り只一途に御仏に仕えます。あなたの好きな庭の白梅一輪添えておきます。

庭の梅 手紙に託しそのもとえ
 (戦死者 故海軍中尉江間信太郎・東京帝大卒・二七才)

現地派遣員横浜出港

パシフィック・アイランダー号で



(中央埠頭六号岸壁)

目次

現地派遣員に託して 江間イクヨ(1)

遺鬼の皆さんへ(2).....小泉 信三(2)

京都での慰霊祭 について (3)

クエゼリン環礁警備日誌(4) 有馬 成甫(3)

現地派遣員を励ます集い (4)

建碑許可の経緯 (5)

サイパンそしてグワム 浮田 信家(6)

募金について 林 茂清(8)

会計報告 佐藤 宗丕(10)

寄附者芳名 (10)

事務局便り (16)

役員篤志会員 (16)

本部 (16)

同胞・祖先・子孫に対する義務

アメリカ人の尊敬するエブラム・リンカンが或る時、人間四十以上になれば、自分の顔に責任があるといふことがあります。それは、四十以上の人間の顔は父母に与えられた儘のものではなく、内に磨かれ、或は鍛えられた心を外に現すものである、そういう意味で、顔は自分で造るものだ、だから自分に責任がある、ということです。これは味うべき言葉で、英雄偉人と云はれなくても、一芸に達した人、一事業を成し遂げた人の顔といふものは、気品とか、威厳とか、力とか、内の何物かを現していることは皆さんも御気づきのことと思います。

森鷗外も或時、人間生れたままの顔を以て死ぬのは恥づべきことだといっています。これも全く同じ意味であります。

私はこの鷗外の言葉を、しばらく借りたと思います。鷗外は、人間生れたままの顔で死ぬのは恥づべきことだといいましたが、同じような意味に於て、吾々は祖先から受け継いだ日本の国土を、ただその儘次の世代に引き渡すのを、恥づべきだと思ひます。吾々は必ず吾々の受け継いだよりも、それをよきものとして、子孫にのこすことを期すべきだと思ひます。国土は自然によつて与えられたままのものでなく、長い年月の間に吾々の祖先が手を加えて造つて吾々に伝へたものです。勿論、日本の島々というものは、自然によつて造られたものですが、それを今あるような国土としたのは、人間

の力です、土地の開墾改良や、道路運河の開通、港湾の設備、河川の改修、ダム築造等々の、ごく手近の例を見ても、今吾々が住みその上に吾々が生きて居る日本の国土といふものは、決して与えられたままのものではなくて、日本人によつて造られたものだといわなければなりません。そうだとすれば、吾々が吾々以前の日本人によつて造られたものの恩恵に浴するよう、吾々も亦吾々の子孫に、吾々の造つたものの恩恵を分け加えたものの恩恵を与えなければならぬ。それをしないのは恥づべきことで、それは生れたまま

遺児の皆さんへ(2)

小泉 信 三

の顔で死ぬのが恥づべきであるのと同じだといふことが出来ましよう。

右には仮りに土地とか河川とか目につき易い項目を並べましたが無形の文化についても同様です。宗教道徳学問芸術の凡てを包む日本の文化といふものは、吾々はそれを祖先から受けて子孫に伝えるのであります。吾々が受けたそのまゝで伝えるのではなく、常に何物か一望むらひは多くものゝしそれに付け加え、よりよいもの、より大きいものにして、次の時代に伝えることを期すべきであります。それが出来ないといふことは、やはり生

れたままの顔で死ぬのと同じだといえましよう。日本国民ということをご考慮して来ると、今日現在日本に住んで居るもののみが日本人でないといふことが、特に感じられます。吾々の祖先も日本人であり、吾々の子孫も日本人である。日本国民といふものは、少しむづかしくいうと、この国土という空間に過去現在未来といふ時間を通じて生きて居るものだといふことが出来ましよう。そこで自然に、吾々は、国民として現在(同胞)と過去(祖先)と未来(子孫)に対する義務を感じるようになるのです。

自ら国を護るといふこと

このように、吾々が日本人として日本の同胞と祖先と子孫に対して負う義務の中、特に重く、そして苦しいのは、吾々自ら国を護る義務です。吾々が祖先から受け継いだ日本を、よりよきものとして子孫に伝えるといつても、その日本という国が、他国から侵されない独立の存在を保っているの

でなければ、話になりません。その日本の国を護るものは誰か。それは日本人自身以外にはありません。勿論、場合により、他国の協力を求めることも出来、またそ

れも必要ですが、日本人自らその決意をし、また犠牲を払うことなしに、どうしてこれを他国にゆだねることが出来ましよう。吾々国民の日本に対する義務、責任の様々なある中に、先づ自ら国を護る、護国の義務といふものは、特に重いものです。世界の国々の国民は皆自ら国を護るけれども、ひとり日本だけは、その必要がないといふようなことを説くものがある。それは人を欺くものです。世界に多くの国があり、民族があり、それが互に理解し合つて仲よく夫々繁栄して行くことは、吾々の何より願うところであり、その方向に向つて努力することは、人類に課せられた義務の一つであると信じます。さて現実の事實は如何といえ、今日の世界の国と国との間には、多くの利害や感情の衝突があり、それがこうして兵力で争うといふことは、残念ながら今日迄くり返されて来た事実であり、今もその危険は、明かに存して居ます。以前には何処の国でも戦争を讚美する風があつて、各国の歴史は、見方によつては帝王や軍人の戦争の手柄話のようなものでした。しかし、戦争の悲惨なことは昔から誰にも分つて居るので、古いシナの詩の句にも、

例えは

一将功成りテ万骨枯

といふのがあつて、世に伝えられています。それは即ち、一人の將軍の手柄の爲に、千人万人の人が死んで、その骨が戦場にさらされるというのです。ところが、段々人間が進歩して、人間の生命や

人格の貴いことが分つて来れば来るに従つて、それを無視したり、破壊したりする戦争の厭はしさといふものは、漸く強く感じられるようになり、何とかして戦争を避けたいといふ願ひから、前の国際連盟や今度の国際連合といふようなものも出来た次第であります。人類の願ひは願ひとして、さて世間の現実は何といへば、誰も戦争の心配といふものがなくなつたといふ配、今以て国々は、自国の安全といふことを心配して居るといふのが事実です。戦争は好きか嫌いかといへば、大多数の人はもうこりこりだといふでしよう。けれども、それなら今の世界でもう戦争の心配はなくなつたのかといへば、誰もそれを信じません。これがあつたの儘の事實であります。

自ら国を護るのが国民として最も重い義務に属するのは、この実情があるからです。過去及び現在の世界の立派な国民は、皆自ら国を護る精神の盛んな国民でありました。また今もそうであります。例えば、スウェーデンやスイスは、最も平和的な国だといわれて居ますが、この両国とも、その国民の護国精神の極めて盛んな国であり、私は一昨年この二国を旅行して、国民の實情を視察し、深くそのことを感じました。

けれども、国を護るといふことは、生ま易いことではありません。前に私が、それを日本人の日本に対する最も重く、また苦しい義務といつたのはそれ故です。凡そ吾々の願うところは、無事に暮らして、自分と妻子及び子孫

の幸福を図りたいということ。特別の天才とか英雄というものは別とし、大多数の人間は、自分相当の職業を得て働らき、その収入によって暮しを立て、結婚し、子供を生み、子供等を無事に養育教育して、出来れば孫を持ち、年を取っても衣食住には困らぬこと、そうして、天命を全うして、先祖から遺され、先祖もそこに葬られている、日本の土に暮りたいものだと思つてゐることでしょう。

けれども一旦事が起れば、国民はこんな願ひは捨てなければならぬのです。人々は親に別れ、妻子に別れて、戦場に出なければなりません。雨露風雪にさらされなければなりません。そうして、何時敵の丸に中らなければならぬかも知れないのです。こんな苦しい、危ないことはありません。けれども、苦しいことはイヤだ、危ないことはイヤだといえ、妻子の住む国、祖先のものでも子孫のものでもあるこの国の独立を護ることは出来ないのです。

譬えば、火や水に立ち向うのは危険なことですが、自分の住む家や村や町の安全の爲には、人は危険を冒しても、火事や洪水に立ち向わなければなりません。火や水は恐ろしい。恐ろしいことは御免だといつて、誰も彼も皆逃げ廻つてばかり居れば、家も村も町も、護ることは出来ません。国を護ることも同様で、誰だつて自分の家で両親や妻子と一緒に暮らしたいし、鉄砲の丸なんかに中りたくないにきまつています。けれども国民に、危険や苦難を冒し

ても国を護るといふ決意がなければ、独立国というものは立つて行かないのです。勿論、戦争は避けたいことで、また実際に、政治家や、軍人や国民一般の心得違ひの爲に、しないでもよい戦争をしてしまつた例は少くありません。そういうのを、シナの言葉で無名ノ帥ヲ起スといいますが、無名ノ帥の実例は、歴史上に無数です。けれどもその避け得られぬ戦争であつても、一旦戦争が起れば国は危うい。その国の危ういときに、国民の義務として一身の安全や安楽を捨てて出て、戦死したり、負傷したりした人々の犠牲の行為というものは、これは国民として有り難く思い、濟まないと感じずにはいられない貴い行為です。火事や洪水の例の前に引きましたから、それに譬えていみましょう。

火事は火の不始末からも起ります。また洪水も例えれば森林濫伐というような失策からも起ります。けれども、火が燃え出したとき、河が増水しても、堤防が危うくなつたとき、この火事は不注意から起つたもので、火の不始末をしたもの責任だから、自分は消さない、また、この洪水は森林の濫伐から起つたもので、罪は濫伐者にあるから、自分は堤防を守らないと、人が言つたら何うでしょう。それと同じように、戦争の原因については、吾々国民として言ひたいことが色々ありますけれども、しかし国難が目の前に迫つてくるときにそれを言つてはいられません。国民は立ち上つて、ふりかかる危険を払わなければならぬのです。支那事変から太平洋戦争になつた

クエゼリン環礁警備日誌 (4)

文学博士
海軍少将
有馬成甫

戦争についても、真実この戦争を好んで起こした日本人は、極く少ないでしょう。大多数のものは戦争を恐れ、厭ひつつ、しかし事々に至れば已むなし、と思ひ定めて戦つたというのが事実でありました。少数の例外者を除けば、あつたのです。(つづく)

昭和十八年
六月二十八日(月)曇、午前七時デング蚊撲滅(防疫)委員会を開催す。スコールあり。風速十米に達す。『養豚実施要領』を脱稿す。豚の生育メキメキ目立つ嬉しさ限りなし。

准士官学生となる三名の送別宴を催す。橋本中尉別れの挨拶に来る。明朝ルオットに赴任する由

六月二十九日(火)晴又曇。午前八時五十分南方にB24・二機来襲(上弦の月あり)。「デング蚊撲滅作業実施方案」を脱稿す。午前八時二十分B24・一機旺洋(オーシャン)に来襲す。高度二〇〇〇乃至三〇〇〇米偵察の爲か。午後司令官部に行く情報を聞く。

日没後「杵ノ崎」入港投錨す。艦長は既に交代し後任鶴岡予備海軍大尉の由。

六月三十日(水)曇「杵ノ崎」に托せられた家信及び玉露を受取る。本日付に臨時賞与(一ヶ月分)有難く頂戴す。本日古来よりの大抜の日なり。午前二時三十分起床(みそぎ)を行い、クエゼリン神社に参拝し掃除地作業を見る。

とは誰も戦争を好きというものはないでしょう。好きどころではないが、しかし、かくなる上は、国民として国家の危急に赴かなければならぬ。これが吾々の務めだというのが、人々の気持ちであつたのです。(つづく)

以上と共に催す。この避地にては珍らしき事一同感謝す。

大本営発表。レンドバ島攻撃三十日の成果。乙巡一撃沈、一大破。大型駆逐艦四撃沈、一撃破。輸送船三撃沈、三大破。飛行機七十七機撃墜、我が方飛行機三十一未帰還。

七月三日(土)晴。午前三時三十分起床、築城工事を巡視す。築城本部より出張の陸軍中佐三浦龍雄氏を案内して重要地点、防弾施設等を巡視す。

午後トラックより船団入港、御嶽山丸、指揮官津田威彦来訪(江田島同紙生)大に欲談。同級生山本松四大佐の病状を伝う。気の毒のことなり。船団出港の際トラック港外にて敵潜水艦の攻撃を受けしも損益なかりしと。家信(五月十七日差出を受領す)。

七月四日(日)晴。午前二時三十分起床、豚を見る。本日出港の鴨(ひよどり)に托しトラック第二護衛隊司令官武田中将に、タコ木の苗を贈る。午前庄司大佐を案内して島内を巡視す。午前十時船団出港につき旧知の運輸指揮官別離の挨拶に来る。飯入隊中の南拓会社員、諏訪丸船員等全部を、乾洋丸にて出発せしむ。

津田威彦大佐及び第六通信隊長鈴木大佐を招き夕食を共にす。小泉少尉ルオットより帰る。ルオット砲台経過及び在任中の諸報告を受く。

七月五日(月)曇、津田大佐を案内して南北砲台その他を巡見す。午後十二時三十分大爆音を聞く。何事ならんと調べたるに一水兵、ダイナマイトにて即死せりとの事(十五頁に続く)

現地派遣員を励ます集い

今年二月六日の定期総会の席上
林会長から現地に派遣する浮田、
佐竹両幹事のため壮行会を開催し
て如何という提案があった。当の

両人は壮行会といういかめしい名
は肩が重いと固く辞退されたが、
出席の全員一致の賛成であったの
でみだしのように励ます集いと改
めて開催のことに決った。
朝香名誉会長も熱心に御賛成、
白金台町の迎賓
館を使用したき
又同館々長田
虎一氏からは格
別の御便宜を与
えられ三月三十
日に行くことと
なつた。



岡野夫人の奇術

4、潜在する会員に本会の真の姿
を知っていただくためNHKや共
同通信社等報道機関の方々。
結果として期待どほり約百五十
人御参加の回答を得た。

(三) 参 集

予定期の一時も前から参集
者がつめかけた。かねてのとおり
役員の方々が受付その他雑用当
つて下さったが一時はさばききれ
ないほど混雑した。受付の終つた
方々は桜の綻びた迎賓館の美しい
庭園を三三五五觀賞した。またサ
ロンの椅子は殆んど満員、戦争の
想い出や、現地派遣員の取沙汰な
どのお話で賑つた。

(四) 壮 行 会

やがて定刻二時となつたので会
場が充てられた孔雀の間に移り、
佐藤幹事の開会の辞ではじめられ
た。まづ国歌君ヶ代合唱、戦死者
に対する黙禱のあと林会長が別項
のとおり簡潔して力強い励の辞が
おくれた。ひきつづき派遣員を
代表して浮田幹事から感謝の辞が
述べられ、村上副会長の首頭によ
る乾杯がありそれぞれ懇談とな
つた。郷友連後宮会長の御挨拶を
はじめ来賓各位の熱のこもつた励
ましの辞がつづいた。

なお浮田幹事は挨拶の内容をメ
モに刷つて参会者各位に受付でお
渡ししたがそのうちクエゼリンに
碑を建てることについての米本國
から正式の承認の来たことの説明
は参会者の深い感謝をうけた。本
件の経過は五頁に譲つた。

(五) 心 算 び

数多の感激をのこして予定の五
時この度の壮挙の成功を祈つて解
散した。

現地派遣員を励ます集 いにおける会長挨拶

本会は屢々申上げた通り十九年
二月六日クエゼリン本島及びその
周辺の島で玉碎した戦死者遺族の
集りでありますが、その当時は何
処で玉碎したのか全く不明であり
只月日だけが公表されていたので
あります。従つて遺族の中で心あ
るものは、毎年二月六日に靖國神
社でお祭りをし、當時を偲んでい
たのであります。その数漸次増加
し遂に昭和三十八年に至り遺族会
を起すことになりました。

御台令を失はれた朝香元宮様を
名誉会長に、元総理大臣石橋様を
顧問にお願いし、二男を失いまし
た私を会長として発足いたしました、爾
後毎年二月六日に靖國神社でお祭
りを行い、同時に玉碎当時の状況を
知ること努力致しました。地域
がマーンシャル、ギルバート諸島全
域に及ぶに従い、会員も漸次増加
し三万五千を超えるに至りまし
た。

この間本日御出席の来賓各位の
御指導と本会役員各位の熱心なる
努力の結果昨今漸く当時の諸状況
が明らかになりました。

これと共に、代表者だけでも現
地に送り、遺骨を蒐集し永くその
霊を慰める為碑を建立するといふ

発会当時の念願が燃え上りまし
た。然るに該当方面が目下米國の
最重要基地であります為外国人は
一切立入が出来ません。何回か厚
生省にお願いしましたがまだそこ
まで手が届かないようです。己む
なく会員自身の手で解決すること
に決し、零細の拠金を集め、米当
局並に渡航について各方面にお願
いし漸く代表者を派遣し、碑を立
てるのが承認されいよいよ今回
の決行を見るに至りました。

ところが拠金額が少なく且つ代
表者を得るに困りましたが、幸に
も常任幹事の浮田信家氏はもと海
軍で海上生活の長い経験をもたれ
るので数ヶ月の日子を犠牲にする
ことをお願いいたしましたところ快諾
せられ、又幹事の佐竹女史はこれ
に感銘せられ協力して随行する旨
決意されましたので一鴻千里に諸
般のことが運んだ次第であります。
行動の概要は浮田氏から説明
があります。

この間米英兩國との交渉も容易
ならざるものがありました幸に
理解ある同情を得て来月横浜港出
港の運びとなりました。出港後の
作業はこれまで大変だと思います
が現地の関係者は兩名の来着を待
ち力添えも申出て下さつておりま
すがこの上とも一層の御援助をお
願ひいたします。

本席はこれまでの報告と御礼を
申し上げたくてお集りを願いまし
ました。誠にありがとうございます
た。

ここに浮田佐竹両君の健康と無
事任務の達成を祈ります。

会長 林 茂 清

クエゼリン島に

建碑許可実現の経緯

クエゼリン島に忠魂慰霊の碑を建てて殉国の霊が永へに安らかに眠るの聖地としたいことは、本会が発足の当初からの念願であった。

マーンシャル諸島とりわけクエゼリン環礁は米軍のミサイル実験発射場として同国の重要基地となっており外国人は勿論、米国人でも軍の特別許可がないと入ることできない制限地域(Restricted area)となつた。日本政府としての遺骨収集や慰霊の行事が未済のため、海上自衛隊の練習艦隊の米国航路或は濠州航路の際寄港するよう希望したがこの理由で承認を得られなかったと仄聞している。

本会も御承知のとおり、我々が行けるよう外務省、厚生省に斡旋方を依頼したが、結局吾々の期待



クエゼリン実験地区司令官
フランシス・C・ヒラー 陸軍中佐

する回答は得られなかった。またこの間ある遺族の方から「アメリカの領土乃至は国連の信託統治領の中に敗北した日本軍の墓を立てさせるわけがないではないか。寝言のようなことを書いた環礁など見たくない。今後御送付なきようお断りする」といった手紙をうけたこともある。

一方ではオックスナードの元米海軍士官ケース、エス・ウイリアムス氏などからは「敗けようが又そこが今米軍の重要基地であろうがあるまいが死を堵して母国を護つた殉国の士の戦死したところではないか。そこに参拝にゆきそこに碑を建てるのに何のご遠慮がいのものですか。日本政府がやらぬなら直接クエゼリンの米軍司令官に要請なさ

い。宛先はこれです。私からも同司令官あて貴会の真意を伝えて実現するよう努力します」と励まし

の書簡を得た。どう考えてもウイリアムス氏の理窟は筋が通る。役員一同はこの

国境を超え恩讐をこえた助言を多とし不可能で

はないという信念のもとに本会独自で解決に向つて邁進することになった。

昨年九月十七日クエゼリンから「この日本人墓地は巨大なレーダー装置に囲まれたとして附近には次々に重要な施設が増設されて来クエゼリンに外国人が入入することはきびしく制限されています切角の慰霊碑でも出入できないマーンシャルの政庁のあるマジュロに建立されては如何ですか。当司令部から非公式にマジュロの政庁に意向を打診したところ歓迎の旨内諾を得ています」という手紙をうけました。

マジュロには事実政庁があり、いづれはハワイとの定期航空が開通するともきいています。従つてマジュロに碑を建てれば何時かはこの碑を参拝に我々多数の会員が訪問することもできる。本部並びに役員会でどちらにしたらよいか迷つた。このため名誉会長、会長、顧問の決裁を仰ぐこととした。何れも会員大部の了承であるなら、少くとも役員会の結論ならばそれでもよろしいが、個人としてはマジュロに建てても意義がないのではないか。参拝の能否よりも戦争中マーンシャル、ギルバート全域の司令部のあつたところ、かつ最も多数の戦死者を生じた島、しかも現在日本人墓地として司令官以下敬虔な祭祀を行っている事実のあるところこんなことを考えると、今更他に移すことは望ましいことではないのではないかという意見が強かつた。

この結果折返シクエゼリンの司令官あて

(一) 碑は参拝ができるよりも英霊が永へに静かに眠る聖所としたい。従つて最も多数の日本人の血汐を染めたクエゼリンにしたい。

(二) デザイン、大きさなど貴方で好ましくない点があるなら、それは御迷惑であろうから如何様にも改める用意がある。忌憚なくいつてもらいたい。

(三) 碑は貴会を待って日本で完成しこれを船で貴島に送り、本会々長から貴司令官に贈呈の形をとる。と申入れた。これに対する回答は十一月二十四日(発信は十一月十四日)本部にきた。その内容は環礁5号に全文の訳をのせたがその中で「さて貴会の御希望に對しても大切な建碑のことを申し上げなくてはなりません。私としては今日から三十日から六十日の間に御返事が差上げられればよいがと念じております。何しろ米本土はこれから七五〇〇哩も距つており、そこできめることですから。この遠方での事務的処理には相当日時を要する」とお解りいただけると

思います」文中三十日といひ六十日と書き又航空便の進歩した今日七五〇〇哩と何れも大袈裟ないい方をしたのは親しきをもつてユーモアのない方をしたのだと思ひ



クエゼリン実験地区首席科長
リードレー、H、オグデン 陸軍中佐

その頃日本ではガム島に太平洋地域四十六万の戦死者の表忠塔をガムに建立する話がありました。私たちがすれば結構なことですが本当にできるのか、それならば本会の希望も早く受領できるのにとやあせりました。

それが現地派遣員を励ます集いの一週間前三月二十四日にクエゼリンから電報が来ました。多少ながくなりませんが本会としてはワシントンからの公式の承認の電報ですので全文をあげます。オグデン中佐からの会の浮田宛、横須賀米基地の電報です。

We have just received approval from our higher Headquarters in the United States for you, cmm if, you wish cmm to fabricate and ship to Kwajalein for placement in the Kwajalein Test Site Japanese cemetery, cmm a grave (以下六頁下段三〇〇へ)

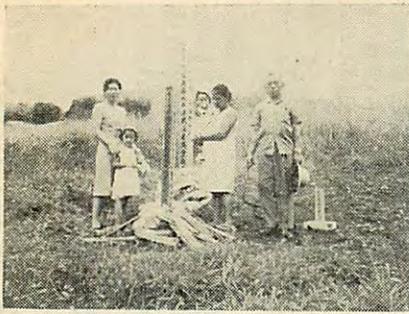
サイパンそしてグアム

現地派遣員の第一報

常任幹事 浮田信家

〔4月22日〕 正午少し前に出港の日が23日の午前七時になったなどは如何にも南洋むけで気楽さを感じました。おいで下さった方々百名をこえるというこんな船でゆくものには珍らしい盛んな見送りであったとのことでした。お心こもった方々ばかり誠に美しいひとときであったことを感じますとともに皆様のお心の何百分の一でもお報いしなければならぬと固く心に誓いました。

〔4月23日〕 多少の疲れのせいか昨夜はぐっすりやすみやした。ところが六時少し過ぎ東京横須賀から見送りに来て下さいました。日曜のため家族も来てくれて客船



グアム島ジーゴ激戦地あと

なみにテープをとりかはす場面もやりました。少し風はありましたがよく晴れた空、海上波なく心地よい出港日寄りでした。七時少し前解纜、中央埠頭六号岸壁を離れいよいよ自分の推進機で走り出したのが七時頃でしたらうか。埠頭でお見送り下さった皆様の幸多かれかしと祈り船室に入りました。十時横須賀から観音崎、さらに久里浜、三崎、城ヶ島をすっきりした富士の前庭にながめ乍ら大島、新島と進み富士山ともお別れして南進し、午後三時三宅島、午後四時四十五分御蔵島とも別れ、午後九時三十分八丈島を右正横三十一哩で日本の領海も出て針路一七〇度速力十哩で父島に向いました。

〔4月24日〕 終日四周水平線という航海でした。佐竹さんはこのような霧囲気はじめてなので太平洋の大きさをつづく感ずるとともにこんな広い海を飛行機で横切られた御主人の幻影を想はれているのではないかと思ひました。

〔4月25日〕 正午少し前父島の二見港に入港しました。埠頭はありませんが投錨しました。荷物若干の揚卸しがありました。船から揚げたのは日本の雑貨のようでした。米海軍の基地隊とでもいったものでしょうか。四・五十人海兵と軍属がいるようです。かつては

東京都の生野菜の供給源とききま

したが見廻したところ雑木が繁茂し農耕地どころではありません。戦前神社でもあったのでしょうか、山腹に鳥居が一つ残っているのも強者共の夢の跡を思い出させる淋しさでした。日本にとっては大切な生糧品の資源であったのが、利用価値の全くないむしろ米国に渡したことは戦争の宿命。夕刻六時出港するまで荒廃した父島を見つめました。

〔4月26日〕 終日水平線を眺め針路一七〇度速力十哩で南下しました。鷗とトビウオの闘争、陸影も船影も全く見えない太平洋の中でやはり生活のための争いのつづけられる姿を見乍ら一日がすぎました。

〔4月27日〕 午前九時頃からウラカス島が視界に入ってきた。また、マリアナ諸島最北端の島、いよいよ南洋に入ったなと感じました。つづいてモウグ島、アツソングソン島と島づたいに南下し夜アグリガン島の港沖合に漂泊しました。電気がない、人口も一五〇人内外の小さな島、ここで患者二名を収容後航海がつづきました。その夜バガン島をすぎ早朝アラマガンの港沖に漂泊。妻が、入港しているペードロという島の監督を収容しサイパンに向いました。

昭和四十年十月九日靈砂出迎へのため百七十人余の会員が横須賀に参りましたが、そのとき見学した「うらなみ」が、遭難船救助のためカロリン群島に急派されましたが、そのときの遭難が、このアラマガン島であったことを思い、身近な因縁を感じました。かくてサ

イバンについたのは夜九時すぎで沖合に仮泊しました。患者その他数名が、荷物とともに上陸したのみでその日は暮れました。

〔4月29日〕 天皇誕生日午前五時のNHKのニュースを聞く。午前六時半から繋留作業が行はれました。サイパンの埠頭は日本時代のものを補強修理したものらしく、長い方は四千噸のペンフィンクタイランダーで一ばいで短い方はせいぜい千噸程度の船が横付けできるにすぎません。マジネロ行のもう一ぱいの船ガンナーズレットのセーマンという船員の父でサイパン政庁病院の薬剤部長のフイリップセーマンが船まで迎えに来て下さいました。日中は市内、戦跡の御案内をいただきました。

南雲中将最期の指揮所にもまいる。また在留那人、将兵が前に敵をひかえ、後に断崖絶壁の窮地に迫られ身を投げた山頂では万感胸に迫りました。かつは全島砂糖キビで埋り、製糖会社の目覚ましいところでしたのに。私などもその頃寄港して、内地砂糖供給源として頼母しく視察した記憶がまだ新です。サイパンの埠頭から外に出ますとタガンタガン (Tagan Tagan) という合歓木 (ネムノキ) に似た雑木が全島生い繁っております。土地の人は戦争前観葉植物として一本いくらと喜ばれたもののだといっています。それが戦後二十余年全島何処にも繁り四・五米にのびています。何万かの人手をもって耕作された甘蔗畑でしたのにどこをあるいてもこの木のため遠望がきかない今日です。その日の夕方

ある村で行われた結婚披露のパー

estone which will not exceed in size the following overall dimensions: ch. height-1.22 mete smch width-1.22 meter smch thickness-92 mete

2 We have also been directed to reemphasize that at no time in the foreseeable future, cmm because of security requirements, cmm will Japanese or other foreign nationals be permitted to visit Kwajalein Test Site to view the cemeite

3 Sincere best wishes to you and the members of your association

訳文

(一) 今本国の上級司令部からあなたが希望のクエゼリンの日本人墓地に、日本で作り、輸送して下さるなら高さ、幅一、二二米以下厚さ〇・九二米以内である限り承認します。

(二) もう一つは近い将来参拝のため日本人又外のあらゆる外国人もクエゼリンに来ることが出来ないこと徹底するよう指令をうけた。

(三) あなた及び遺族会員の御幸福を祈ります。

かくて、クエゼリン島に希望のとおり墓碑が建てられることとなりました。米国占領下の、しかも軍事上重要な基地となっているクエゼリン本島に敗戦国軍人軍属の慰霊碑が建てられることになったのは偏に会員の御熱意と、米国の人達の人間的な御尽力のおかげであります。

皆様と共に関係各位に對し心から感謝の意を表したいと思ひます

テイーによられました。ノルウッド高等弁務官夫妻も見えていました。このような席ですから来意だけは告げ月曜に訪問する旨挨拶しましたが予め私共のことは知っておられました。中央に用意された料理を高等弁務官もその夫人も好みのものを皿にとって、立食の風景はとてもなごやかでした。よい機会だこのときにわたりをつけてやれなど日本流の仕事にむすびつける場面は見られませんでした。次から次によられた人が祝いに来て、談笑の中に夜が更けるのだからです。

〔4月30日〕 日曜。船で一時間余のテニアン島のお祭りの日なので多数の人がそちらにいったらしくサイパン島は静かでした。今日もセーマンさん一家のお招ねきで島を視察しました。サイパンホテルの経営者が近く米本土に一年間いってくるといので山の中腹の彼の山荘で送別パーティがありそれに招待されました。日本語を話せる古老にも多数あいましたが砂糖時代を謳歌し、物価高の今をなげいておりました。

〔5月1日〕 八時少しすぎ政府に高等弁務官を訪問しました。従来の好意を謝し用意の風鈴を贈呈しました。三、四十分話したり写真をとったりしたあとビザの信託統治領滞在期間を十月末まで延してもらいました。そんなに滞在するつもりはありませんが万のとき書簡では手間どりますのでついでにとっておきました。今日の私共の行動は横浜の明正交易の金子さんから紹介されたサブランさんのお世話によるものでした。

〔5月2日〕 朝六時に出港、ガムに向いました。次第に南に下り、暑さも本格的になりました。ところで今後の予定が若干変りました。ガムでの積荷残り次第トラックに向います。トラックで荷卸が終ったら再びサイパンに戻り、更に積荷してガムに寄り、ポナペに直航することになりました。マジュロ着の日は六月に入るのではないのでしょうか。

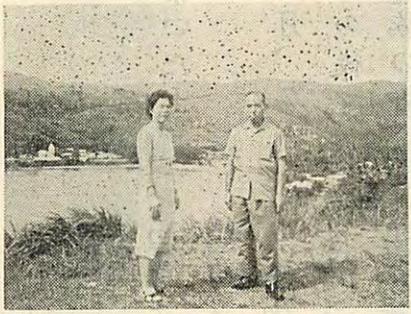
夕食をしてきた船内食堂に新聞売りの少年が入って来ました。パンイフックチャール紙でした。第一頁の一番上の欄に大きな活字で日本ガムの定期航空の第一便の記事がのっていました。今まで16時間を要したものがマニラを経由しないために一九五五分になったとか。毎週二回あるとか、こちらよりも東京は25度もひくい56度という涼しさなど書いてあります。運賃も今まで三七八ドル(一三六〇〇〇円)であったのが(一三九ドル)(五万円)になったと書いてありました。便利になったものです。

出発のとき皆様から大変ご心配いただいたのは、私共の健康のことでありました。先は何ともいえませんが全然異常なく東京のときと同じ健康状況です。さておき又船艙の御心配もいたいただきましたが全く感じありません。出港の翌日夜や荒れましたが、私は勿論佐竹さんも元気にしています。健康と船艙について何卒御放心下さいませようお願いします。

船客はサイパンまでは元南洋興発の中島文彦さんが一人おられましたが、あとは私共二人、従って食事毎に船長、機関長外高級船員

四人計八人で食卓を囲んでおります。かねてミクロネシヤ人種は純朴善良のものが多くときどきおりましたが、この乗員も皆よくして下さいませ。

毎回の食事はどうしても肉類多く脂肪の多いものばかり、しかも相当多量です。食事を準備する配膳室は出入勝手であり冷蔵庫の使用も開放されていますのでいつでも熱いコーヒーをセルフサービスでめまますし冷たい水でも果物でも



グワム島ウマタク海岸を見下して食べられます。いつもまた誰でもそうなのかどうか知りませんが、彼等は私共を我党の士と思ってい

下着は毎日自分たちで洗っています。部屋にかけておきますと朝までには乾きます。このころ毎日シャワーもあびています。仕事はサロソでしています。船室に事務机がないので一上り降りするのは厄介といえは厄介ですが、や

もありますので階段の上下は何回でもやっています。特に私の場合船に乗るといえば軍艦とか駆逐艦でした。必ず当直もあり、又副員あり又自分の関係なくも総員作業のときは配置につかなくてはなりませんでしたが、こんどは全く船の仕事に関係なくむしろ船の仕事のときは遠慮すべきなので時間の使い方に工夫をこらします。出勤退社の要もなし手紙の接受もなく単調な日です。私はこの生活に順応するため眠いと思つたらろろとサロソであろうと。目がさめれば午前一時であろうと五時であろうと何かかにかやっています。港に入れば一人でも二人でも話をしてみます。こんな勝手の日を送っていますので体力的にも精神的にも変調を来さないのかも知れません。

〔5月3日〕 未明グアム島のアラブラ (Ala) 港の海軍埠頭につきました。米海軍に届ける物資を半日積卸してました。昼から埠頭に降りてみましたが海軍埠頭なのでタクシーも来ません。二、三個所電話しましたが自宅は留守(仕事に出た後) 職場は昼休みで通じません。その中米国の汽船会社のエージェンツにやっている人で前ガンナースノットに乗っていたフローレスという人と話している中に海軍用地内ではタクシーは来ないことがわかりフローレスさんが市内見学につれていってくれました。四時まで最も繁華なアガニヤの町を見て帰りました。

〔5月4日〕 やはり金子さんの紹介のクルツさん夫妻が、八時す

ぎ船に來られました。夕方四時まで車でグアム島を一周して下さいませ。船からアガニヤ街を経てジゴ (Yigo) の日本軍玉碑のあとにゆきませ。昭和四十年に某氏が見えて墓標を樹て慰霊供養を行われたところ。二億一千万円を内地で募金し、この地に荘大な慰霊塔を建てる計画のあるところと聞きます。クルツさんがそこで写真(六頁)をとって下さいませ。一番高いのが今年一月建てられたもので、次が四十年のもの、一番小さいのは茨城県がその花崗岩で作った碑です。主要道路からこれこれ一キロも入ったところなのですがその間補装されていないため凹凸もはげしく今朝のスコールの水がまだ溜っているなどその碑のまわりの雑草もかなり伸びています。もう一枚の写真(七頁)は、島一周のコースの終りに近いウマタク (Umatao) といつて一寸した海岸の村落の上スペイン時代の古跡の見張所とところでクルツさんがとって下さったものです。

浮田幹事は大勢の会員から託された英霊への手紙やお供えものの整理、記録に、又準備していった図書文献等での現地の勉強に日を送っているそうです。明正交易の金子さん御提供の島民の日用語集はもう全部暗記して下さったことでしょう。

佐竹幹事はお得意の写真を沢山撮って送ってきまして、環礁の色が載せられないのが残念です。

昭和四十二年五月一日

会長

林 茂 清

会員の皆様

寄附金募集について御願ひ

皆様愈々御健やかに御過しのことと拝察いたします。

御承知の通り本会は去る昭和三十八年六月、クエゼリン島戦歿者遺族会として発足し、その後マーシャル諸島及びギルバート諸島全域の遺族の御希望によって、同方面全海域の遺族を包含することになり今日に至っております。そして、設立四年目の今日、設立以来の念願であった最終目標に到達しようとしているのであります。未だ南溟の孤島に曝されている遺骨を我々の胸に迎え、戦死の地に私共遺族の手で慰霊碑を建てようとしてい

るのであります。

私共は、国の為には戦って斃れた軍人軍属の骨は国が拾ってくれるものと信じ、再三再四関係方面に陳情してまいりました。

他の地域では、政府によって遺骨収集が行はれ遺族の墓参も行はれているのに、マーシャル、ギルバート方面は「難しい地域」ということで未だ手もつけられていません。昭和二十八年に政府が派遣した南方八島慰霊団は、海上八〇〇哩の遠くの船上から遙拝しただけで済んだことにしたのであります。

理由はどうあれ私共肉親としてはこのままではすまされません。已むに已まれぬ気持から私共自身の手でやることになりました。

三年間の努力の結果幸いにして私共の悲願は現地軍司令官その他数多くの米国人の御理解するところとなり、更に積極的な御協力を頂くこととなって別項報告の通り去る四月二十三日浮田、佐竹両幹事を現地に派遣したのであります。

両氏は目下パシフィックアイランダー号で一路現

地に向け航行中であり、九月中旬には大任を果して帰国することになっております。

本会は設立以来国から一銭の補助も頂かず、活動資金はすべて遺族の浄財によって賄ってまいりました。このような事業に他力本願は慎むべきでありそれが真に英霊を御慰めすることと信じたからであります。

設立以来の会員の拠出金合計は六六六万円余の多きに達しました。会員の熱意の程がこの一事にも証明され、このような例は他の団体に無いことだそうであるが、本会が特異なものとして各方面から注目されているところであります。

しかし乍ら、今回の大事業と比較して只今の会の財政は率直に申しあげて前途必ずしも樂觀を許さないであります。

今回の事業は、本会の設立以来の最終且最大の事業でありその所要経費も亦最大であります。

本年二月六日、靖国神社での總會の折、国及び各都道府県知事に対し資金の御支援をお願いすることになり、役員と各地の有志会員協力して懸命

の努力を続けておりますが、本年度の予算が既に定って了ったこと又他の類似団体とのかね合い等から予定額に到達するかどうか今のところ予断を許しません。

本日迄折にふれ度々御寄進下さった方々には心から感謝いたして、今回又お願いするのは誠に心苦しいのでございますが、事情御賢察下さいましてこの際別段の御高配の程切に御願い申し上げます。

又、いろいろの御事情から今まで御寄進なされなかつた方々には、たとえ少額でも結構ですから御協力頂けますならばありがたいことと存じます。

会員の皆様に対する募金の御願いは恐らく之が最後になると思ひます。何分の御配慮の程、切に御願い申し上げます。

終りに、皆様の御幸せを心から念じ、浮田、佐竹両氏が、大任を果して無事帰国されることを祈ります。

事務局だより

○霊壘未送付の方は、今すぐお届け下さい。

五頁に記載のとおり、クエゼリンに碑を建てるのが決りかけた。碑の中に肉親の方の書かれた霊壘を納めることにしています。ついでにはまだお届けない方が多数あるようですが、なるべく早目に、おそくも七月末までには必ず本部に到達するようお送り下さい

○軍事郵便貯金払戻しについて
クエゼリン、ルオット、ブラウン三島の戦死者が生前軍用郵便所に預入れた預金の調査は一応終了したが、その他の島嶼については調査未済であります。郵政省ではこれを調査するための資料の提出を待っており本会としても郵政省の御好意をうけたいが、全員の調査となると提出資料の作製が容易でない。そこで貯金があったのではないかと考えられる方は戦死者氏名部隊名、本籍地それに遺族名、戦死者との続柄、現住所を会本部にお知らせ下さい。はがきで結構です。おそくも八月中に本会に届くよう御送付下さい。

○在庫品について
環礁、霊壘用紙、霊砂、各種写真、料金加入者負担の振替貯金の用紙等本会からおわけする物はすべて在庫しております。特に環礁は新聞や月刊、週刊誌等と異なり一度見ればよいというものでなくて創刊号から揃えて意味がありますので揃っていない方はお申込み下さい、先着順にお送りします。

○現地派遣員 浮田、佐竹両幹事の現地報告は、横浜出港以来五回ありました、最近のものは、五月二十四日クエゼリン島発となっていて大要は次の通りです。

『エビゼ島に悪い病気が発生して四、五人死亡した模様、それがマジロ島に伝染したので船はマジロに行けなくなり、予定を変更してクエゼリン島に着きました。早速、ヒールー司令官やオグデン首席将校に会い緊密な連絡をとりたい。このところトモモ君が二人共至って健康なので御安心ありたい。役員や会員の皆様によりしく。』

予想していたような事態が早くも発生しました。流行した病気がどんなものかわかりませんが体力の弱っている頃ですから心配です。

パンフィックアイランド号の航路が変更されますと、次の便船ガンナースロット号の来るのを待つて乗りかえることになりませんが、荷物が五十個もあることですが、日本にいる私共には想像もつかぬ難儀が次々と起るのではないでしょうか。

これから先の御苦労の程が思いやられます。日本軍の守備した全部の島を廻ることになっていますが、舟一隻借り上げる費用はありますが、小舟に乗せて頂くより外に方法はあります。

電灯もない小さな島で、次の舟の来るのを幾日も待っていることもありましょう。島の食料の少いことを考え、石油コンロ、包丁、

組や即席ラーメン等の食料をも携行しておりますが、お体に变りなればと案じられます。

○現地到着後の報告は、今年末に発行する環礁七号に載せる外皆様にお知らせする方法がありませんが、一刻も早くと望まれる方々の為にお二人の帰国直後現地報告会を東京で開きます。

参加御希望の方はその旨を七月末迄に本部にお申込み下さい。日時・場所決定次第お申込みあった方にお知らせします。

○本会の財政は度々申しあげます通り決して余裕あるものでありません、機関紙の発行、二月六日の慰霊祭、会員への通信等平常の仕事だけならばそう苦しいはありますが、今年は本会の最終事業である現地派遣と建碑に四九六万円余りの資金が必要となつて、三十八年會設立以来最も困難な年となりました。

資金獲得には会長以下の全役員と各府県有志会員が懸命の努力を続けておりますが、見通しは暗いのであります。八頁の会長のお願いの趣旨お汲みとりの上何分の御協力をお願いいたします。

○環礁は本号迄毎号一万七千人の方々に送りしてきました。このうち会に浄財を御寄進下さった方は延三千六百余人ですが、その外の方々にも何時かおわかって頂ける日が来るかと考えお送りしてきたのであります。之も、本部、役員、有志会員の奉仕があつてこそ行はれたことですが、夫も限界に達しました。

会の財政上、第七号からは、今迄のように全員に環礁をお送りす

本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	監事	橋口 昭利
顧問	石橋 湛山	監事	末広 正男
相談役	朝香 孚彦	監事	有馬 成甫
会長	林 茂清	監事	板垣 徹
副会長	加藤普佐次郎	監事	大野 克一
副会長	村上 義一	監事	瀬沼 光久
副会長	浮田 信家	監事	土屋 太郎
常任幹事	佐藤 宗丕	監事	中島 昌彦
常任幹事	秋山 正清	監事	中田 虎一
常任幹事	井上 賀雄	監事	成田喜代治
常任幹事	宇田川 ヒサ	監事	長谷川 栄次
常任幹事	木村 久子	監事	長谷川 敏
常任幹事	国松 ふみ江	監事	林 幸市
常任幹事	小泉 文江	監事	松平 永芳
常任幹事	佐竹 エス	監事	村岡 達志
常任幹事	萩原金次郎	監事	安藤 小夜
常任幹事	昼間 栄平	監事	白鳥 梯子
常任幹事	山浦 信子	監事	本木 光江
常任幹事	岡野 正文	監事	

ることはできなくなりました。環礁第七号(本年未発行)は、環礁を読みたいとの申込みのあった方だけにお送りしますので御希望者は七月末迄に御遠慮なくお申込み下さい。

○各都道府県知事にお願ひした揮毫と御寄進について、府県の有志会員に御連絡をお願いしましたところ、会員が夫々の立場から全力をつくして下さつておられます。

難しい問題なので早急にはゆかないと思ひますが、一県でも落ちたらそれこそ画竜点睛を欠くこととなり、英霊に相済まぬこととすし、現地軍官民の方々にも恥しいことですから今一段の御尽力をお願いいたします。

本部としては、政府、全国知事会等に陣情を続けております。有志会員には各県の現況を別途お知らせいたしましたので御参考として下さい。

本部
 東京都中央区日本橋
 蛸町二丁目十一番地
 泉商事株式会社内
 マーシャル方面遺族会
 電話〇三二六四二番